Rewrite　～灯花another～

傾世催眠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｒｅｗｒｉｔｅ　～灯花ａｎｏｔｈｅｒ～

【Ｎコード】
Ｎ１６２７Ｖ

【作者名】
傾世催眠

【あらすじ】
風祭学院の人気女教師にして、ガーディアンが誇る若き敏腕指揮官・西九条灯花。
今でこそ良き教師として瑚太郎やヒロイン達を見守り、また戦闘においても絶対的な実力を持つ彼女だが、新米当時は偵察用の鳥型魔物すら倒せぬダメ超人だった。
これは、わずか数年で別人の如く変貌した彼女を中心に、瑚太郎の“空白の数年間”にあった出来事を“勝手に”描いた物語である。

上書き1　いきなり初体験

風祭学院への転入初日。

私は、いきなり“敵”と遭遇した。

折角のクラスメートの申し出を断り、独り放課後の校内を探索していた最中。

違和感に気付いた時には手遅れだった。

行けど戻れど、延々と続く廊下。

深い霧にでも覆われているのか、窓の外は何も見えない。

窓は全てはめ殺しの様になっていたので、やむなく破壊を試みたが傷一つつかなかった。

こおから脱出するには、出口をみつけるしかないと言う事だろう。

お父様が餞別にくれたデジタルの時計が、静かに時を刻む。

もうじき完全下校時間。

仲間……ここでの上司への報告の時間もとうに過ぎている。

異変に気付いて救助に来てくれないだろうか？

どうやって？

そもそも、ここは一体何なのだろう？

ガーディアンが使用する“圧縮空間”に近い物だとは思うけど……この広さは有り得ない。

ループの可能性も疑ってみたが、途中落としてきた目印のヘアピンはみつからないままだ。

この学院はガイア資本だから、これもガイアが作った物なんだろうけど……。

無駄に広過ぎない？

そして何でわざわざ校舎を模してるのだろう？

使用目的がイマイチ理解出来ない。

私みたいに迷い込む生徒が居るから？

そもそも、私は迷い込んだのか、はたまた意図的に迷いこまされたのか？

誰かの仕業だとしたら、これだけ歩き回っているのに何故罠や敵と出くわさないのか……？

もしや何処からか観察されている？

だとしたら、そいつを倒せば出られる……てのがお約束だけど……。

敵が出てくれないんじゃどうしようもない。

「ふう……」

試しにへたりこんで隙を見せてみる。

敵が誘い出てくれればそれで良し。

例え出なくてもここまで歩き詰めだ。暫く休憩にしよう。

ふうっ……。

壁に背を預けた途端、突然廊下の先に人影が湧いて出た。

それも、奥から近付いて来たのではなく、まるで空間から這い出てきたかの様に忽然と現れたのだ。

ローブを纏った見るからに怪しい人影と、足下に従う犬らしき物。

ガイアの魔物使い！？

「まさか、本当に出るとはね……！」

跳ねるように立って反射的にナイフを抜き構える。

犬型……あれがハウンドタイプというやつか。

話に聞く、ガイアの戦闘型の魔物の中では最もポピュラーで、“強目の雑魚”程度の扱い。

ガーディアンの平均的な戦士なら、普通に一人で倒せると言うのだが……。

新人の中でもドベに近い私の実力で、あれに勝てるだろうか？

いや、魔物に勝てなくとも勝機は十分に有る。

魔物はそれを操る魔物使いがいなければ存在出来ない。

つまり……先にあの魔物使いさえ倒せば……！

ダッ！！

同じ思考に思い立ったか、はたまた自分に向けられた殺気に気付いたか、ローブを翻し魔物使いが逃走を始めた。

逃がさん！！

その背に向け、必殺のナイフを放つ。

魔物が飛び出す事も見越してあさっての方向に投じたナイフは、天井すれすれを掠めて魔物の上を通過し、更にフックしながら正確に魔物使いの首筋、延髄に迫る。

殺ったっ！！

だが、

バサッ！！

「なっ……！？」

勝利を確信したその瞬間、信じ難い事が起きた。

魔物使いが尋常でない速度で振り返り、ナイフを事も無げに弾いて見せたのだ。

まさか……！？

魔物使いは、魔物を使役出来る以外はただの人と変わりない物だと聞いている。

にもかかわらず、今の反応速度は明かに並の超人か、それ以上の代物だった。

「ワオオオォォォォォォォウ！！」

驚きに支配されていた私を、魔物の咆哮が強制的に醒ます。

マズイ！！

魔物が来……えっ！？

バサッ！！

魔物とそれを注視していた私との間に、突如人影が割って入った。

何で魔物使いの方が前に！？

パニックに陥りながらも、狩猟者としての本能で背後に飛び退き、両手に持ったナイフをカウンターで浴びせる。

スッ！

体を素通りした！？

いや、正しくは残像が残る程のスピードで横にかわされたのだ。

しかし、それすら気付く間も無く、まだ空中にあった私の鳩尾をローブから伸びた拳が貫く。

「ッッッ……ぅっ……！！」

空中でのガードも間に合わず、派手に廊下を転がり悶絶する。

肺が潰れてしまったかのように、息が出来ない。

呼吸だけでなく、まるで身体全体の機能が強烈な負荷によってシャットダウンしてしまったようだ。

暫くは動けそうにない。

ああっ……私死ぬんだ……。

朦朧とする意識の中でそれを認識すると、様々な思い出や想いが過ぎる。

折角、人生諦めてガーディアンになったのに……。

折角、また学校に通えるようになったのに……。
私の人生、こんなにあっさり殺されて終わるんだ……。
ゆっくりとやってきた魔物の影がさす。
観念して目を閉じる。
お父様、お母様、先立つ不孝をお許しください。
ぺろ
味見でもしているのか、頬をなめられた。
ぺろぺろぺろぺろぺろ
執拗になめられる。
もう、殺すならひとおもいにやって！
鬱陶しさにたまらず薄目を開ける。
「ク～ン」
つぶらな瞳が心配そうに私を見ていた。
とてもこれから私を喰い殺す物の目とは思えない。
と言うより……この仔普通の犬なんじゃ？

それじゃあ、あれも魔物使いじゃ……ない？

「ダメだ。全然ダメ。０点どころかマイナスだ西九条。お前使えねえよ」

もしやと思っていると、ダメ出ししながら魔物使いがフードをはだける。

そこから現れたのは、眉間にあるホクロがトレードマークな無精ひげ。

他でもなく、彼こそが風祭学院潜入調査班のリーダー、司馬優次郎だった。

「これが実戦だったら、１００回は死んでるぞ。命だけは助けてやる。その代り、お前は今日から俺の“奴隷”だ」

一体……何……を……言って……？

色々問い詰めたい所が山積みだったが、訪れた安堵感にかろうじて繋がっていた意識の糸が断ち切られた。

「それで姐さん、一体どうなっちゃったのよ！？」
テーブルに身を乗り出した今宮が、興味本位全開で訊いてくる。
同期で同じ班だった面子で喫茶店に集まり、私達は情報交換と言う名の近況報告をしていた。
そこで私は、昨日我が身に降りかかった災難を話したわけだが……。
まあ、当然そうくるだろうと予想した通りの反応が返ってきた。
「『お前はペット以下だ』て言われて、強制的にナンディちゃん……司馬さんのワンちゃんのお世話係にさせられたわ。うちのマンションペット飼っちゃいけないのに……」
まあ、必要な時しか吼えないお利口さんな仔なので、目撃されなければ大丈夫だとは思うけど。
「おいおい、何とぼけちゃってんだよ姐さん？俺らが聞きたいのは、司馬先輩にどんなエロエロな御奉仕をさせられたかって事だよ！」
やはり誤魔化しきれないか……アホな今宮の追求の手がさらに伸びてくる。
でも、残念ながら拍子抜けする程何も無かったのだから仕方ない。
「いや、それよりその学校にあった空間の事とかの方が大事じゃないか？」
「はぁ？何言っちゃってんのよお前？空気読めっつうの！ここは全力で西九条をイジるトコだろうがよ！なあ、式部」
いつもの調子で天王寺を閉口させた今宮は、私の隣に座る式部雅弘（しきぶまさひろ）に話を振った。
式部も私達と同期のガーディアンで、私と同じくカザコーの潜入調査班に回されている。
私より背が低く童顔で中性的な顔立ち、黙ってれば美少年と言えるのだが……、
「そうだよ！トーカちゃんのオパーイどうなっちゃったの！？」
この通り、頭の中はただのエロ中学生だ。

「何もないわよ！本当に有ったら大問題じゃない。それと、トーカちゃんはやめて」
「いやいやいや、んな訳ねえって！奴隷にしといて何もしねえって、一体どんな紳士だよ！？」
「そうだよ！健全な男子なら、そのオッパイを前にして理性を保てるはずないよ！」
「お前らちょっと落ち着け。注目浴びてるって」
興奮した二人を天王寺がなだめてる間に、私もぬるくなったコーヒーで一息つく。
そりゃあ、私もそういう事をさせられるのかもと不安だったけど……。
今のところ司馬さんにそういった素振りはまったく無い。
むしろ、私にあまり興味が無いと言った感じだ。
それはそれでほんのちょっと女としてのプライドが傷つくけど……。
「彼の中で奴隷って言うのは、半人前以下の“見習い”とか“雑用”みたいな感じなんでしょ。式部の事は“駒”だって言ってたし……」
“駒”とはつまり使えるって意味なのだろう。
訓練所での成績は一（ほんの少しだけ）私の方が上だったのに……この評価の差は納得いかない。
「そういえば、式部も先輩の試験受けたの？」
「うん。多分一緒だと思うけど……」
「どうやってアレをクリア出来たの？」
「どうって、廊下歩いてたら変な違和感を感じたから、暫くその辺うろうろしてたらローブの人が出てきて、普通に話かけたら『つまらんけど、まあよかろう』って」
「何よそれ……そんなんで良かったの？」
私は散々歩き回ったあげく死ぬ思いまでさせられたんですけど……。

「そりゃあ中は変だと思ったけど、入った時に違和感なんてあった？」
「僕は何となく感じたけど……」
式部も困った顔をしている。
彼もあれがどういう物かまでは知らないだろうから、仕方無いか。
私達は超人で一括りにされてはいるが、こういった感覚的な物は特に個人差が大きい。
それに私の場合、大分浮かれてたからなぁ……。
何らかのシグナルがあったのに、見逃していたのかもしれない。
敵が現れてからは予想外の事ばかりでとても冷静ではいられなかったし。
うう……失敗したなぁ……。
「それで、その空間て結局なんだったんだ？」
「さあ……元から在った物を勝手に使ってるって聞いたけど、詳細までは聞いてない」
「なるほどな……」
天王寺は思うところがあるのか、首を捻って何かを考えているようだった。
彼は地元の人間であり、個人的に魔物狩りをしていたとも聞く。
訓練所での成績はドベで正直冴えない奴だが、実戦経験者ゆえか妙に慎重で抜かりない所がある。
「まっ、マジな話すっと、お前らんとこ実はわりと当たりじゃね？」
「どこがよ？いきなり試されて、お前は使えない奴隷だとか言われたのよ？」
「実戦にかなり近い経験させてもらえたんだから、ありがたいと思えよ。俺らのとこなんて、何もねえぞ。せいぜいヤンキーどもの小競り合いくれえだ」
一応彼なりの慰めなのか、今宮は愚痴りつつかったるそうに立ち上がる。

「さてと、んじゃ俺らそろそろ行くわ。あ～あ、勇者センセーに続いて西九条にも先越されたか」
「だから、いい加減その呼び方やめろって。またな、西九条、式部」
次いで天王寺も残っていたコーヒーを飲み干しながら立ち上がり、二人は足早に店を出ていった。
放課後ほとんど自由な私達と違い、彼らの仕事はこれからがメインになるのだろう。
そうよね。私達、任務でやってるんだもの。
奴隷呼ばわりは酷いが、実害は無いんだし、今は自業自得と反省しよう。
茶化しながらも実は本気で悔しそうだった今宮を見て、大分溜飲も下がったし。
同期の、特にあの二人に負けるわけにはいかない。
難物そうな上司の下で前途多難だが、そう思えば頑張れそうな気がした。
「まずは、先輩を見返してやらないとね！」

と、この時はかなりポジティブに考えていたのだが……それから暫くして起きた“ある出来事”により、私は再び自らの甘さや未熟さを痛感する事となる。

上書き2　イエス！フォーリンダイブ

日課である見回りの任務（街を適当にぶらつくだけだけど）を終えた私は、自宅のドアの前に立っていた。
風祭に滞在する間、独り暮らしをする為に借りたマンション。とは言え、ここは敵地。自宅の前とは言え、中に入るまでは気が抜けない。
慎重に周囲を確認し、気配を探る。
……うん、お隣さんが急に出てくるような事も無さそうね。
私は鍵を取り出してドアを自分が入れる最小限の広さに開け、身体を滑り込ませると同時に素早く鍵をかけた。
これでよし、と……。
「ただいま～ナンディちゃん。いい子にしてまちたか～？」
私は一気に緊張を解くと、たまらず背後の同居人に抱きついた。

「犬の話なんざ誰も興味ねえっつうの！」
私がのろけていると、今宮がいつもの調子で話の腰を折る。
「ええ～、でも本当に可愛いのよぉ？私が家に帰るとぉ、いっつも玄関で待っててくれるの～」
お利口さんに座って待っていてくれている姿を思い出すだけで、ついつい頬が緩んでくる。
艶のある青みがかった黒い毛並みに、狼に似た精悍な顔立ちにオッドアイ。
その風貌から犬種はシベリアンハスキーぽいが、正確な所はわからない。
司馬さんも仔犬の時に拾ったので犬種は不明だそうだ。
「だから、んな事訊いてねえって。それよか、その後御主人様と

はどうなったよ？」
「期待している様な事は何も無いわよ。ああ、でも彼の重大な秘密が明らかになったわ……」
「おっ！意外な性癖でもわかったか？」
「違うって。先日、登校中に司馬さんに声をかけられたんだけど、その時ね……無かったのよ……」
「何がよ？」
「ホクロ……司馬さんて眉間にホクロがあるんだけど、それがその日は無かったの。それで、それを教えてあげたら、『ああ、忘れてた』って鏡見ながらマジックで書いてた」
「……」
「そ、それって……！」
今宮は神妙な顔つきで、天王寺は酷く狼狽しながら共に言葉を失っていた。
隣で一人、式部だけは大きなパフェを食べる事に夢中で、私の話なんぞ聞いちゃいない。
「……手に紋章とか書いちゃう小学生と同じノリ……だよな？」
「『第三の目』……ってか？マジかよ？いくらなんでも、高2だろ？有り得ねえだろ！」
「そうかな？インドの人とかみんな付けてない？」
「いや、それ多分、ヒンドゥー教か何かの風習だろ？俺もよくは知らないけど……」
ぺろりと唇の周りをなめながら話に混ざってきた式部に、天王寺がつっこむ。
どうやら聞いていなかったのではなく、単に動じてないだけらしい。
だが、この驚愕の事実を聞いて、彼は平然としていられるだろうか？
「司馬さんはヒンドゥー教徒じゃないと思う。その時に何気なく訊いてみたのよ。『おまじないか何かですか？』って、そしたら彼

はこう言ったわ。『まあ、そんな所だ。おかげで俺は“目”になれた』って……」
「……ええっ！？」
驚きのあまり天王寺は立ち上がり、今宮は寄りかかっていた体勢のままズルッとイスを滑りテーブルの下に沈んだ。
しかし意外と大物なのか、式部だけはへえと感心するだけだった。
“目”とは、大まかに言えば目に関する能力を持つ能力者の事であり、通常は視認出来ない物を見る力を持っている。
我々ガーディアンの目的の一つに、世界を滅ぼす存在である“鍵”の発見と破壊があるが、“鍵”には認識撹乱能力が備わっており、“目”を持つ者でしか視認出来ないらしい。
その為、“目”と言うだけで組織では高待遇が約束され、俸給も私達の何倍も貰えてるそうだ。
「いや、まさか、ジョークだろ！？確か“目”ってかなりのレア能力って話じゃなかったか？」
「でも、思い当たる節は有るのよ。ほら、この前学校に圧縮空間が在るって話したじゃない？」
「姐さんがボコられて奴隷にされたって話な」
「それはもういいから！とにかく、普通の人には見えない空間を発見出来て、更に利用出来るなんて、見えてるとしか考えられないじゃない」
「マジか……！？ヤベエぞ、おい天王寺！こりゃあ、お前もホクロ書くしかねえ！」
「自分でやれよ！」
「ああ、こりゃ失敬。勇者センセーにはやっぱ手に紋章っきゃねえよな！どうするよ？マジで何かのオーラが出て、ババーンとパワーアップしちまうかもしんねえぞ！」
「出るか！」
今宮の勇者・天王寺ネタでオチがつき、この場は慌しいままお開きとなった。

風祭に着任してからの私の生活は、平穏その物だった。
それこそ、組織に入る前とほとんど変わらないくらいに。
学校でも一応ガイアに関わる生徒の監視と言う任務はあるが、むしろこちらが怪しまれない為にも今は普通の学生として溶け込めと司馬さんから言われている。
まあ、この任務は実質それが目的なのだろう。
ガイアの表の顔である日本マーテルのお膝元だけあって、家族や親類、交友関係まで含めれば、まったくマーテルと関わりが無い生徒の方が珍しく、マーテルのミーティングに頻繁に通っている生徒もかなりの数にのぼる。
それら全てを私達三人だけで監視しきれるはずもない。
もっとも、それ以前にいくら幹部の子女が居たとして、そこから何かしらの情報が得られるとも、身内が多く通うこの学校で目立つような事をするとも思えない。
つまり、この場所はガーディアンにとってさして重要ではないのだ。
「わかってた事だけどね……」
そんな場所だから、訓練所の落ちこぼれ組だった私や式部にお鉢が回ってきたのだろう。
ただ、そう考えると分からないのが司馬さんだ。
貴重な存在である“目”は、それだけに普通は最前線、もしくは拠点に配置される物なのではなかろうか？
同期の“目”である大西も、訓練生の中で成績トップの三国班の一員として最前線の偵察を任されたと聞く。
なのに、彼はこんな所でふらふらしていていいのだろうか？

まさか……“目”というのはやっぱり嘘？
……なんだかそんな気がしてきた。
普段の司馬さんを見てると、とても凄い人と言うか、とても超人だとは思えない。
中肉中背でいつも猫背。気だるそうに欠伸ばかりしていて覇気がまったく感じらず、ぼ～っとしていて何を考えているのかさっぱりわからない。
ホクロの件もそうだが、髪はぼさぼさで寝癖がついててもお構いなしだし、制服は上着の下Tシャツだし、学生で無精ひげってどんだけ剃っていないんだか。
まあ、それでも私なんかより遥かに強い事だけは確かなんだけど……。
実際の所、私は司馬さんの事をほとんど知らない。
一応、報告で定期的に顔を合わせてはいるが、必要最低限の事しか喋らないし、そもそも報告するような事がここにはほとんど無いので、「特に異常ありません」「んじゃ、解散」と一言で会話を終わらせてさっさと帰ってしまう事もざらだ。
学年も違うし、転入生の私達があまり親しげでも変に思われるかもしれないが、一応同じ持ち場を任された同僚なんだから、もう少しコミュニケーションをとろうとしてくれてもいいと思う。
それとも……私が奴隷だから？
役立たずな奴隷と会話しても無駄とか思われてる？
それはある意味こき使われるよりキツイわ……。
ナンディちゃんのお世話くらいしか命令されてなかったから忘れかけてたが、実はおもいっきり奴隷扱いされていて、しかも自分はそれに気付きもしなかったと思うとおもいっきりへコんできた。
今日もこれから会う事になっているのに……。
「……あれ？」
階段を上りながら考え事をしていた所為か、どこまで上がったかを失念する。

「……と言うよりこれって……」
また無限ループ？と言いかけて口を噤んだ。
これが司馬さんの仕業なら、失言は間違いなく減点される。
てか、またいつ空間に入ったか気付けなかった……。
既に減点されてると思うと泣けてくる。
いや、まだ挽回するチャンスはあるはず！
滲んだ涙を拭って上を向く。
少しでも良い所を見せないと、このままじゃ永遠に奴隷扱いだ。
……でも、一体どうすりゃいいのよ～？
具体策が何も出てこず、改めて己の無力を悟り階段の途中でへたりこむ。
そもそも、私の能力じゃ脱出のしようも無いのは前回確認済みだ。
前回はこうやってへたりこんだら司馬さん達が出てきたけど……。
「君、どうしたんだい？」
途方に暮れていると、不意に背後から声をかけられた。
とてもいい声だった。
男らしさと、包んでくれるような優しさを感じる、聞くだけで安心出来る声だった。
「気分でも悪いのかい？」
隣にきてしゃがみこみ、軽く背に手を当てながら覗き込まれる。
端整な顔が間近にあってドキリとした。
サラサラな髪に切れ長の眉と瞳、小さ目で通った鼻筋と細い顎。
もちろん無精ヒゲなんて一本も無い。
「大丈夫？喋れる？」
「あっ……すみません。その……ちょっと疲れてしまって……」
いけない……ついつい見とれてしまって素のリアクションをしてしまった。
「立てるかい？」
「すみません。ありがとうございます」
差し出された手を借りて立ち上がり、頭を下げつつも彼を査定を

始める。
比較的長身の私よりも背が高く、スリムな体形にきっちりと着こなされた制服がよく似合っている。
見るからに優等生で美形で長身、これはもしや……！
「あの……もしかして生徒会長さんですか？」
「ああ、僕が生徒会長の塩屋（しおや）だ」
ビンゴ！
むしろ、この人以外が生徒会長だなんて有り得ないもの！
「えっと、君は……一年生？」
「はい！最近転入してきた西九条です！」
「そっか……この学校広いからね。迷っちゃったかな？」
「え、ええ……」
「どこに行くんだい？よければ案内するけど？」
「えっと、屋上なんで大丈夫です。お気遣いありがとうございます」
「屋上……？」
「あっ……変ですよね私、屋上に行こうとして迷うなんて……」
優しい笑顔に一瞬不信が浮かんだので、慌てて誤魔化す。
そりゃあ、屋上に行くのに迷う人は普通居ないわよね。
「いや、何分広い学校だからね。疲労からくる錯覚や目眩を覚える生徒は割りと多いんだ。だから、あまり気にしなくていい」
「そうですか」
「それじゃあ、僕は行くね。ああ、もし辛いなら、少し保健室で休んでいくといい」
「いえ、大丈夫です。ありがとうございました」
最後まで気遣ってくれる塩屋さんに、ひたすら恐縮して何度も頭を下げながら見送った。
紳士……！
彼が見えなくなった後も、暫し立ち止まり胸の高鳴りの余韻に浸る。

まさか“恋の予感”？
ダメよ！私はガーディアンの超人ですもの！
いつこの街を離れる事になるかわからないし、何より常に死と隣り合わせの世界に彼を巻き込む訳にはいかないわ……！
などと脳内で悲劇のヒロインごっこをしながら、私はスキップをするように階段を上った。

「……それで？」
屋上につくと、早速待っていた司馬さんに圧縮空間に迷い込んだ事を報告した。
どうやら今回は司馬さんとは無関係だったようだが、私が大変な目に遭ったと言うのに相変わらず司馬さんの表情はつまらなそうなまま変わらない。
「どう脱出したらいいか迷っていたら、生徒会長の塩屋さんが助けてくれました」
「……それで？」
「……以上……ですけど……？」
「はぁ？」
おもいっきり怪訝な顔される。
そして暫く目をつぶって何かを考えていたかと思うと、あさっての方を向いてしみじみと語りだした。
「塩屋ってさ……カッコいいよな？」
「えっ？」
「背は高いし、顔もなかなかイケてるし、勉強も運動も出来て、性格もいい、おまけに生徒会長だ。男の俺から見てもカッコいいと思う」

「そ、そうですよね！私も素敵な人だな～って思いました」
意外や意外、司馬さんも塩屋さんの事は特別に見てる？
そりゃあ、そうよね。あれだけ完璧だと、認めるかひがむしかない物。
と、一瞬のんきに思ってしまったのだが……甘かった。
「ホント、とてもガキの頃に自殺未遂やらかした奴だとは思えねえよな」
「そ、そうなんですか！？あの塩屋さんにそんな辛い過去が……」
「ああ、それでマーテルにのめりこんで、マーテルの方でも才能を買われ、今じゃ立派な広告塔だ」
「……マーテル？……ええ～～～～～～っ！？」
「西九条……今直ぐそこから飛び降りて死ね」
司馬さんは、初めて見せてくれた笑顔で私に死刑を宣告した。

上書き3　サード・アイ

「まったく、ようやく何かネタを仕入れてきたかと思えば……西九条、やる気ねえなら仕事辞めてくれないか？こっちはお嬢様の道楽に付き合ってる暇はないんだ」

圧縮空間から私を助けてくれた生徒会長の塩屋さんがマーテルだと言った司馬さんは、心底煩わしそうに戦力外通告をしてきた。

死ねの次は辞めろって……そんなに私の事が嫌いなわけ？

「やる気ならあります」

「ええ～～～～～～っ！？」

さすがにムカッときて反論すると、司馬さんはさっきの私の驚きを真似して見せ、それを溜息をついて一度リセットしてから真顔で言う。

「なら、尚更辞めるべきだ。本気でやってその程度の注意力しかないんじゃ、前線に出ても死ぬだけだし、偵察すら任せられん。親の手前抜けられないなら、事務にでも回してもらえ」

「そんな……だって、調査より学校に溶け込む事を優先しろと言ったのは、司馬さんじゃないですか」

「そう、“優先”だ。１００パーセント学生気分でいろとは言ってない。てか、わざわざ調査なんてしなくても、これだけ異常な町の異常な学校に居ればいくらだってネタは転がってるだろ？お前はそれらに何一つ気付いてないのか？それとも……“知っていて”あえて素知らぬふりをしているのか？」

その瞬間、司馬さんのペンで書かれていただけのはずの眉間の瞳が、カッと大きく見開かれた。

第三の眼から眩い閃光が放たれる。

その無数の光の帯は、驚きと恐怖で慄く私の身体をレントゲンの様に透過し、何から何まで洗い浚い私の“情報”を持ち去っていく。

そして一切を失い空になった肉体は石化し、砂となって崩れ風に

流されていった……。

「うひょお、第三の眼おっかねえ～！！」

私の話を聞いて、今宮はいつものように大仰に驚いてみせる。

収穫祭前夜、私と今宮と天王寺の三人はファミレスに集まっていた。

収穫祭の期間は学校も半分休校となるので、私は今宮達と共に行動する事になっている。

訓練所での斑が違う式部は、あちらの班に合流したので、こちらには来ていない。

「でも、本当に、あの時は死んだと思ったのよ？錯覚だとは思うけど……もしかしたら、幻術みたいな物かしら？」

「マジありえるかもな。汚染系って、ヤベー薬とか出せるみてえだし」

「何かそう言うと麻薬みたいだな……」

「だから、一種の麻薬でしょ？」

「気付いたらすっかりジャンキーにされちまってて、司馬さん無しじゃ生きられない体にってか？うは、そうなったらマジ奴隷だな西九条」

「やめてよ……それに、収穫祭が終わって異動になれば、司馬とももう会わないだろうし……」

収穫祭が終われば任務は一区切りとなる。

学校はそれ程重要ではないだろうし、何より司馬さんが私を必要としていないのだから、別の任地に配属される事になるのはまず間違いないだろう。

せっかくの学生生活がこれで終わってしまうのは残念だが、これ

以上司馬さんと一緒に仕事をするのは精神的にきつい。
それこそ、ナンディちゃんに癒されてなかったら今頃……はっ！！！
「でも、そうなったら、ナンディちゃんとも一緒に住めなくなっちゃうのよね……」
それだけがとても心残りだ。
はあ……司馬さんにナンディちゃんを譲ってもらえるようお願いしてみようかしら？
無理よね……そんな事言ったら、また「辞めろ」って言われるだろうし。
辞めるなら譲ってやるとか言われたら、本気で悩んじゃいそうだ。
「西九条は本当に犬が好きなんだな」
「そりゃあね。犬は人間と違って嘘つかないし、何より可愛いもの」
「まっ、犬の話なんざどーでもいい。それよか、司馬さんの事なんだが……あの人マジでヤベー人かもしれねえ」
私のワンちゃんへの想いの丈をどうでもいいと言われ少しカチンときたが、今宮が真剣になったので聞くだけ聞いておく。
こういう時の彼は、何か重大な情報を話す可能性が高い。
とんでもなく下らないネタの場合も割りと多いけど……。
「ヤバイって？」
「コイツはあくまで司馬さんがマジで『目』だったらの話なんだが……あの人の正体は国内最強の『目』“サード・アイ”かもしれねえんだわ」
「司馬さんが……！？」
あの人が国内最強の『目』！？
「ちょっと待てよ。あの人って目をペンで書いてるんだろ？そんな人が最強なのか？」
「いや、だからマジで『目』だったらの話だ。てかよ、俺も色々探ってみたんだが、まず『司馬優次郎』を知ってる奴がほとんど居

ねえんだわ。ここに居ついて長い立ち班の先輩方でも、誰も知らねえし。だから、ぶっちゃけ大した人じゃねえんじゃね？と思ってたんだけどよ……」

「もし本当に貴重な『目』だったら、誰も知らないなんて有り得ないって事か？」

「まっ、そゆ事。んで、マジで目持ちで偽名だったらって仮定して探ってみたら、ヒットしたのが伝説の“サード・アイ”だったってえ訳だ」

「最強って、そんなに凄い人なの？」

「はあ？サード・アイネタなら、訓練所に居た頃からチラホラ聞いてね？」

「知らないわよ。私達あんた程噂好きじゃないもの」

そこから今宮が語った話は、耳を疑う物ばかりだった。

幼い頃から能力に目覚めていた彼は、その能力故に小学生の内から戦場に駆り出され、既に多くの戦闘を体験し、多大な功績をあげている。

彼が最強たる所以は、単に『目』としての高い能力だけでなく、洞察力や分析力と言った『目』の能力で得た情報を最大限に活かせる頭脳と、個人としても相当に高い戦闘力を持ち合わせている事にある。

総合的な能力は既に江坂さん以上と言う声も。

しかし反面、その高い能力故か上官に対してもズケズケと物を言い、独断専行も多く、清水さんとは犬猿の仲として有名。

また、指揮官としても秀逸だが、自分の意に従わない者は容赦なく粛清し、彼によって再起不能になったガーディアンは数知れず、指揮した戦闘その物による犠牲者の１０倍は居ると言われている。

加えて、上層部や組織自体への批判、放言をたびたび繰り返す為に上からも相当睨まれており、その為、高い能力と結果を出しながらも最近は干され気味。

「それで学生やってる訳か……辻褄は合うよな」

「……私、本当に潰されるとこだったのね……」
むしろ、あれだけ虐められて能力を失わなかっただけマシに思えてきた……。
普段のだらしない姿に惑わされがちだが、確かに余程の能力がなければ敵の圧縮空間を利用したりは出来ないだろう。
そうか……実はあの人凄い人なんだ……性格は最悪だけど。
「あんまお近づきにはなりたくねえ人だよな。仲間と思われたら、こっちまで出世が遠のいちまうだろうし」
「モロに部下だったんですけど……」
大事な収穫祭を明日に控えながら、結局私達は噂話に花をさかせただけだった。
この三人でこうして集まって話す事は、もう二度無いなどとは思いもよらずに……。

上書き４　真相

～Ａｎｏｔｈｅｒ～

毎年恒例の収穫祭により、風祭市は大いに賑わっていた。
その喧騒から離れた郊外に広がる森の入り口に、数人の若い男がたむろしている。
「そういや、西九条ってどうなった？やっぱ例の先輩にやられちゃったのか？」
「今宮から聞いた話じゃ、まだっぽいよ。犬の世話やらされてるとか」
「マジで！？勿体ねえなあ……あいつ性格キツそうだけど、見た目はいいのに」
彼らはただ延々くだらない事を駄弁っているだけだったが、森に近づく者に目を光らせ、「祭の期間中は、森へは立ち入り禁止だよ」などと森に入ろうとする者を阻んでいた。
街の青年団か何かだろう。
大半の人間はそう勝手に納得し、特に疑問も抱かない。
確かにその解釈はそう的外れな物でもなかった。
彼らはこの祭の影のスポンサー団体の一つである“ガーディアン”に所属する者達であるのだから。
街の名物として毎年多くの観光客を呼び込む“収穫祭”。
しかし、その多くの人達は知らない。
どこにでもありふれた祭の名に、自分達の命運すら係わる重大な事実が隠されている事を。
そして今年もまた、有史以前から続くこの地を巡る永き戦いが、再び始まろうとしていた。

「あれ？つながらねえ……」
夕暮れ時、定時連絡の為に通信機器を手にした男の一人が首をかしげる。
「どうした？」
「いや、なんかつながんねえんだ」
「はあ？電池切れとかじゃね？」
「いや、充電はしておいたはずだけど……故障か？」
敵地とも言える地で、突如本部との通信不能に陥ったのだ。
だがしかし、彼らは慌てるどころか「その内直るんじゃね？」などと悠長な事を言うばかりで、事の重大さにすら気付かずにいた。
彼らは皆、“立ち班”と呼ばれる見回り組であった為、誰も実戦経験は無かったからだ。
加えて、彼らの持ち場が想定されている“戦場”の外にあった事や、敵対勢力はあまり軍事的行動に精通していない事、ここ数年は敵方に大きな動きが無かった事なども、少なからず影響していたとも言える。
いや、そうではない。
根本的な緊張感の欠如。
彼らは皆、超人的な能力に目覚め、自らを特別な存在だと自負して生きていた。
“ガーディアン”と言う大そうな名前の組織に入り、そこで自分以上の能力者の存在を認知しようと、彼らは“超人”であり続けた。
例え優劣があろうと、“特別”である事に変わりがないからだ。
自分達は“超人”と言う特別な存在で、平和を守る“ガーディアン”であり、悪の敵対組織を狩る絶対的な“狩猟者”であると信じて疑わない。
自分達が負ける事なんて有り得ないと思っているのだ。

その増長が、人類の命運がかかった任務を帯びて敵地に居るにもかかわらず、彼らを“ゆるく”させていた。
「ん？あの鳥何か変じゃねえ？」
通信役とは別の班員の一人が、橙色に色付いた森の木の枝の一つに、奇妙な鳥がとまっている事に気付いた。
それなりの距離があったが、超人である彼らには十分視認出来る距離である。
胴体部は普通の鳥だが、頭部の形状が歪で、とても自然界の物とは思えない。
「魔物っぽいな……殺っとくか」
「おっ、いくのか？」
発見者の側に居た男は、鳥を確認すると瞬時に狩猟者の顔になり、獲物を凝視しながら腰のポーチから得物を取り出した。
それを見るや、発見者の方は何故かニヤニヤとしながら視線をそらす。
男が取り出したのは……ただの野球のボール程の石だった。
そう、これが彼の武器なのだ。
『投石』
恐らく、人類が最初に手にした人類最古の武器である。
「ただ石を投げるだけかよ」と、後ろで笑いをこらえている同僚のように馬鹿にしてはならない。
徳川家康の石合戦の逸話などにあるように、銃火器が戦場の主役になる前までは、投石は弓や槍と並んで最もポピュラーな攻撃手段として実戦で用いられてきた。
何しろ、超ローコスト（拾えばタダ）で投げるだけなら訓練も要らず、それなりに殺傷力も有る。
また、銃刀法のある日本でも、持っていても誰にも咎められない利点も大きい。
そして何よりも、この武器には“歴史”がある。
人類が最も古くから、最も多く使用してきた凶器であるがゆえに、

練達し、極めた者の数は剣や弓の比ではない。
そして“超人”とは、それら先達の技能を、後天的に伝承する者達でもある。
「とどくか？」
「余裕」
ぽんぽんと手の上で石を数回軽く投げて弄んだ後、男はワインドアップで振りかぶり、まるっきり野球のピッチャーの投球モーションで投げた。

ビュッ！！

カンッ！！

森に金属同士がぶつかりあった様な硬質の音が響いた。
元野球少年でもある彼の投げた石礫は、１００マイルを余裕で超えた速度で鳥に直撃し、見事枝から射ち落としたのである。
「おー、さすが！」
「じゃあ、回収頼むわ」
「はあ？なんで俺が……？」
「今ので仕留めてなかったら、飛んで逃げるかもしれねえだろ？そうなった時、俺がまた射ち落とす必要があるし、茂みに入っていくのは伐採系の方が得意じゃん」
「……」
笑ってた事に気付いてやがったか？
その後ろめたさもあり、同僚は渋々獲物の回収に茂みに分け入っていく。
だが、
「ん？」
茂みの中頃まで行った所で、不意に見えていた男の頭部が消えた。
かがんだか、窪地にでもなっていたのだろう。

見張っていた野球男は別段不信も抱かず、同僚か獲物が出てくる事を次弾を手にして待っていた。
「岡本～、みつかったか～？」
しかし、それから数分が経ち、さすがおかしいと思い名を呼んでみる。
だが、返事がない。
「おい、どうした住吉？」
「いや、それが……」
かわりに他の仲間が何事かと野球男・住吉のもとに集まってきたので、彼がバツが悪そうに事情を説明すると、先程通信をしていたリーダー格の男は不快感を示す。
「勘弁してくれよ……今本部と連絡できねえんだぞ？他に敵が居たらどうすんだよ？」
「連絡できねえって……こんな森の入り口でか？」
「なあ、その怪しい鳥っての怪しくね？」
「怪しいから怪しい鳥なんだろ？」
「そうじゃなくて、そいつが怪しい電波かなんかで通信を妨害してたんじゃないか？」
リーダーとともにきた残りの一人・春日野が、頭が悪そうな言い回しをしがらも鋭い指摘をする。
「なら、倒せていたなら通信が回復しているかもか」
そう思い立ったリーダーは、通信機器の元に戻って確かめる。
だが、繋がらなかったようで仲間達に向けて首を振った。
「ダメだな。まだつながらねえ。仕留めきれてないのかもな」
「どの道、岡本は探しにいかなきゃならねえだろ？ついでにその魔物も探そうぜ」
「そうだな。俺と春日野で探しに行くから、住吉は引き続きこっから見張ってろ」
「あ、ああ……気をつけろよ」
岡本を行かせた事で少なからず責任を感じていた住吉だったが、

自分の能力があまり接近戦向きではない事も知っているので、大人しく二人が茂みに入っていくのを見送った。
だが、
「えっ！？お、おい！！どうしたー！？」
その二人の姿も岡本を見失った辺りで消えてしまい、大声で呼びかけるもやはり返事がない。
突然訪れた静寂と孤独。
この時になって、ようやく彼は恐怖を覚えた。
あの辺りには敵が居る。
仲間三人はきっとそいつにやられたに違いない。
「うおぉぉぉぉぉっおおおうおおおぉぉぉぉっうおぉぉぉウァァァァァァっ！！」
怒りとそれ以上の恐怖に駆られた住吉は、錯乱したように両手でありったけの石を投げ始める。
ポーチの中の石を。
それが無くなれば大小問わず地面の石を。
そしてついには看板を破壊し、道標を引っこ抜き、更にゴミや支給された組織専用の通信機器までも、敵が潜んでいるであろう仲間が消えた辺りに向かって投げ続けた。
「ハアッ……ハアッ……」
茂みに十円ハゲの様な地肌の剥き出しになった跡を作りあげ、玉切れになって彼はようやく止まった。
あれだけ出鱈目な攻撃をしたのだ。さすがに超人の心肺機能をもってしても息が乱れている。
それゆえに、彼は気付けなかった。
背後から迫る黒い影の気配に。
「ッカハッ！？」
跳躍した黒い影――巨大な犬が背後から踊りかかる。
彼は何物かに襲われた事に驚くと同時に気管に穴を開けられ、何ら抵抗すら出来ずにそのまま首を捻られ絶命した。

「どうやら、他は順調の様だね……後は僕次第か……」
意識の集中を解くと同時に目を開けた少年は、何も無い部屋で溜息混じりに呟いた。
そう、本当に家具どころかドアすらも無い、壁すらも曖昧な“空間”と言った方が正しい部屋に彼は一人立っていた。
ここは、彼専用の簡易圧縮空間。
彼は恐らく世界で唯一、この風祭の地にのみ伝わると言う亜空間生成の業を会得している、ガイア最強の魔物使いとも称される存在である。
だが、その最強の彼でも、少々目の前の状況に困惑していた。
異常に発達した植物群と、その深緑と同じ色の無数の帯の中央に立つ少女の形をした存在。
『鍵』だ。
確証など何も無いが、直感がそう告げ、無条件でそれを信じられた。
敬虔と恐怖。
湧き上がる二律背反の衝動に、今直ぐ飛び出して跪くか逃げ出したくなる。
そんな物を自分も持ち合わせていたのかと、それらを自嘲で制す事で、少年は何とか理性を保っていた。
ガイアから課せられた彼の任務は、『鍵』の保護である。
だが、目標を目の前にしながら、彼は二の足を踏んでいた。
想定外の珍客の所為である。
迷い込んだ?二人の人間の少女と、それを追ってきたらしきガーディアンの男……。

その男は新人で大した力も無く、持ち場も森から遠かったはずだ。
ゆえにノーマークだったのだが、この男は何故か森にやってきて、こちらの配置した魔物を全てスルーしながらここまで辿り着き、どうせ雑魚だと始末する為に放った猟犬を返り討ちにしてみせ、『鍵』に接触してしまったのだ。
しかもだ。
「まさか……見えてる！？こいつ『目』だったの……！！」
たまたま迷子を捜してて、たまたま『鍵』に辿り着いて、たまたま『目』持ちっておかしいだろ！！
彼は心の中で神につっこんだ。
この作戦は、数年をかけて万全の布石を打ち、練りに練られた完璧な物であったはずなのだ。
それが今、たった一人のイレギュラーの存在で崩されるかもしれない状況にある。
男を始末しようにも、『鍵』を刺激してしまうかもしれず、下手に手出しは出来ない。
通信手段は封じてあるから、他のガーディアンに情報は伝わっていないとは思うが……。
「問題はあの人達か……」
少年は再び森の戦況を把握すべく意識を集中させる。
「うっ！？」
思わず怯んで集中した意識が霧散する。
この短い間に旗色が悪くなった事は一瞬で理解出来た。
彼の使用する偵察・連絡用の魔物が、相当数反応が無くなっていたのだ。
「この調子じゃ、通信網の回復も時間の問題……いや、もう回復されたか？」
最早、戦局は完全に覆ったと言える。
そして『目』であるあの男なら、この場所を嗅ぎつけるのも時間の問題だろう。

「やるしかないか……出番だよ。『アバドン』」
少年は強硬手段に出る覚悟を決め、自身の持つ最強の魔物を起動させるべく意識を集中させる。
だがしかし、
「あれ……！？」
『鍵』の方でまたも予想外な動きがあった。
と言っても、今度は“良い意味で”である。
なんと『鍵』と接触していた男が、『鍵』の攻撃を受け倒れたのだ。
片腕が切断され、頭部と胸部からかなりの出血が見られる。
まず致命傷だろう。
「おおっ！！ラッキー！！そうだよ。世の中そんな都合よくいかないって」
思わぬ展開に、少年は喜々として改めて魔物を起動させ、任務を遂行しようとする。
しかし、またも奇妙な事が起こり中断を余儀なくされる。
迷子？の一人が倒れた男にすがりつき、必死に『鍵』に何かを懇願しだしたのだ。
「まさか、あの子も『目』だとか？おいおい、『目』ってレア技能なんじゃないの！？」
意外過ぎる伏兵の存在に、少年は泣きたくなる。
彼女が『目』だとすると、『鍵』を拉致する所を目撃されかねない。
そしてそれがガーディアンの知る所となれば、ガーディアンも全力で『鍵』の奪還もしくは破壊に乗り出し、当然『鍵』を守るガイアとの全面戦争になるだろう。
ゆえに“敵に『鍵』の降臨すら察知されずに保護する”事が今回の作戦の目的であり、その為に通信を遮断し、敵の部隊を襲うなど無数の陽動を行ってきたのだ。
ここでしくじれば、画龍点睛を欠く事になる。

「可哀相だけど、あの子も始末するしかないかな……」
などと逡巡していると、驚くべき事が起こった。
「えええええっ！？」
何と女の子は『鍵』の緑の帯をつかむと、倒れている男の身体に突き刺したのだ。
「助けたいんじゃなかったの！？」
瀕死の男はバタバタと暴れ悶え苦しんでいた。
介錯のつもりなのだろうか？
そして女の子は、押さえつける様に男の上に乗っている。
「おっ、チャンス！！」
女の子の意識は完全に男にいって、背後の『鍵』の事はもう眼中に無い。
それを好機と見て、少年はまんまと『鍵』の保護を成功させた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1627v/

Rewrite　～灯花another～

2011年10月30日03時14分発行